

(二) 秋も待っている

雲間に覗く

猜疑心の青空が

微笑みかけそうになる

ふと笑みが消え

その険しい顔が

秋風の詰まった大きな袋の口を

固く締め直す

心急く思いに顔を赤らめ

照れくさそうに眼をしょぼつかせる

取りたくて取った歳ではない

いくら抑えていても

焦りがすぐ顔を出したがる

「生き返る」と、笑顔を思いだす人間たちを

思う心が、つい先走る

手元が緩んで、ついつい秋の香りを漏らしてしまう

人間たちには罪なことだ

快い幻想ほど罪作りはない

秋は口元をきりりと締め

白い眼をむいた

戸惑っている真夏の太陽に向けて

きりりと姿勢を正す

「そうかい、そうかい、まだなのかい」

引き下がる真夏の太陽に向けて

照れくさそうに笑う

太陽の顔には汗がじりじりと滲み始めた

(二〇一九年九月二四日)